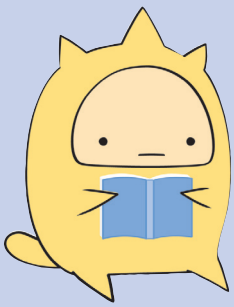
Vol.11
図書館だより
山梨県立大学

ISSN 1884-1112

YONZYA

よんじゃー

世界の大学図書館
上　ブカレスト大学中央図書館
（撮影：熊谷隆一）
中　コロンビア大学図書館
（撮影：三井朋美）
下　上海復旦大学図書館
（撮影：名和敏光）



CONTENTS

巻頭言 …… 2
特集「学びの場としての図書館」 ……3～7
図書館通信／編集後記 …… 8

巻頭言

大学図書館は「学修」の場である

山梨県立大学　学長
清水　一彦

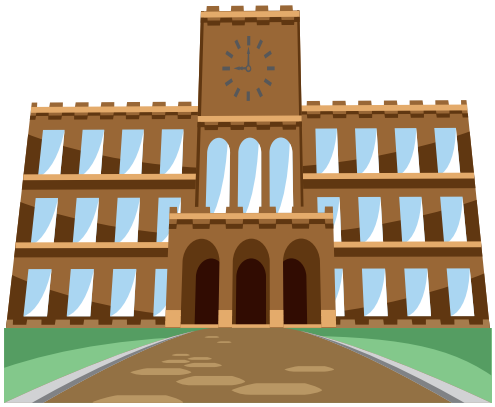
本来、ユニバーシティー（university）には、「大人の大学」という考え方があり、それを構成する学生も大人として認められてきた。しかし、わが国では学生はまだ子どもであるという学生観が根強い。それは学生の視点の欠如といってもよい。

いうまでもなく、大学はあらゆる学校制度の頂点に位置し、高等学校以下の普通教育とは異なった学術中心の場であり、オリジナルな探求を通じて真理を追究し、新たな知識を生み出す機関である。ユニバーシティと呼ばれる大学の最大の原理は、学生にも教授にも共通して求められる自己決定（self-direction）であり、それゆえ大学は本質的にはあらゆる面において強制には馴染まない。そのため大人の学校としての大学は、自主的判断のできる人間であることを前提としているのである。

大学の単位制度は、高等学校のそれとは異なり、授業のほかに学生の自学自修を前提に成り立っている制度である。　そして、この単位制度と結びついた学びが「学修」ということになる。それは、高校までの「学習」とは異なる概念である。つまり、「学習」は、知識や技能を獲得する方法が“まねる”とか“模倣する”といった限られた意味になっているのに対して、「学修」は、“まねる”“模倣する”のみならず、さまざまな方法による幅広い自主的な学びも含む概念となっている。

実際、学習と訳されるラーニング（learning）の意味には、“まねる”“模倣する”といった意味は希薄であり、それは「知識や技能を獲得する、あるいは獲得された知識や技能」という意味しかないのである。それゆえ、ラーニングの訳としては「研究」とか「学問」の意味合いがより相応しく、「学修」に近い言葉とされる。なお、スタディ（study）は、「本を読むこと」を原義とし、むしろ「研究」に近い意味合いでもある。

大学図書館は、大学の「学修」には不可欠な場であり、学問研究を進めるラーニングやスタディの場であることを認識しましょう。大学設置基準において図書館や実験室等の施設・設備に一定の条件が求められているのは、学生が自主的に学び、研究し、知識を身につける能力をもっていることを前提としているのであって、それなくしては真のユニバーシティとはいえないからである。



現代における図書館の意義　～大学時代の想い出から

私が入学した当時の大学では、語学の授業を除けば出欠をとる授業はあまりなかった。生意気な学生の一人だった私は、必要最低限の単位を取る工夫をしながら、興味が湧いた講義や演習は二・三年生以上対象でも一年生の時から受講した。また、入学直後から学術系サークルに所属し、週二回開催される研究会に必ず参加したのだが、そこでは上級生がレポートの書き方や発表の仕方等を始め、大学生活全般について熱心に指導してくれた。そんな先輩たちが何やら難しい議論を毎日のように戦わせていたので、何とか自分も早くその輪に加わりたいと思い、焦ったりもした。入学から半年過ぎたところで、先輩から秋の学園祭に向けてサークルの研究誌を発行するので、一年生の私たちにも「論文」を書くように言われて驚いた。サークル室で悪戦苦闘しながら徹夜で執筆したことが昨日のことのように懐かしく思い起こされる。それ故、当時の私にとって大学図書館はなくてはならない存在だった。何しろ入学以来背伸びし続けていたので、どこかでじっくりと古典や専門書を読み、そのエッセンスを自分の血肉とする必要に迫られた。そこで、独学の時間と空間を確保するめに、図書館の書庫に籠もって数席だけ用意された机と椅子を「指定席」として使用した。書物は山のように周りに溢れていて、私さえその気になれば、著者が直接語りかけてくれた。「ネット検索」が当たり前になった現代だからこそ、むしろ書物と真摯に向き合う時空とそれを支える図書館の重要性が増していると考えるのは私だけであろうか。

（国際政策学部 総合政策学科　熊谷隆一）

両輪として図書館とフィールドワーク

私はいつの頃からか「二元論」という考え方に強く惹かれるようになった。理性と感性、聖と俗、自由と秩序、競争と格差・・・。このような対立する概念の平衡を保つ精神こそ大事なのではないか、と考えてきた。このエッセーの依頼を受け、思い浮かんだ言葉のひとつがまさに二元論の平衡を説く言葉「不易流行」である。不易流行とは、いつまでも変化しないであろう大事なものを維持しつつも、時代に合わせ、新しい変化を取り込んで いく、そういった活動のなかに本質があるという考え方であろう。

私にとって図書館とは、「不易の宝庫」だ。古典、すなわち、時代を耐え抜いてきた、いにしえの偉人達たちとの対話が行える場所。もちろん、図書館は最新の情報をもたらしてくれる場所でもあるのだが、私には古典がきちんと揃っているアンカーのような場所、そういったイメージが強い。

一方、私の研究・教育活動にとっての「流行」は、現場を訪れ、見聞きし、そして感じる、そういったフィールドワークによってもたらされる。教育活動では、実習、演習がそれに当たるだろう。山梨県立大学に赴任してから、県内外、国内外での現地調査を行ってきた。そこからもたらされる現場の最新情報は刺激的だ。不易と流行の相互応答を通して見えてくるもの、それが物事の本質なのではないか。私にとって、研究であれ教育であれ、図書館とフィールドワークは、物事の本質をつかむための欠かせない両輪なのである。

（国際政策学部 総合政策学科 安達義通）

図書館は五感で味わおう

大学時代、図書館に入り浸っていました。本も好きなのですが、空間としても好きだったんです。見渡せば、天井に届かんばかりの高い本棚。ぎっしりと並んだ大量の本。難解そうな題名。手に取るとズシリとくる重さ。古い本独特の香ばしいような匂い。思い返すと、大量の蔵書の迫力に圧倒され、「世の中、自分の知らないことばかりだ。もっと勉強しなければ。本をたくさん読まなければ」と焦っていました。本の物質性、その存在自体が五感に訴えかけてくる。空間が知的好奇心を掻き立てる。図書館には、そんな教育効果があったように感じます。実際、大学時代に、その後の自分の人生を大きく左右する本と出会うことができました。

そんな私も最近はすっかりブックカフェ派です。人の気配や適度なざわつきが意外に心地よく、本を読んだりモノを書いたりするのが捗ります。たまたまカフェに置いてあった本を手に取ったら、思いがけずおもしろくて、読み耽るなんていうこともあります。それが高じて、北杜市に建てる予定の自宅でブックカフェを開こうと目論んでいます。

でも、最近、図書館にいて改めて気づいたことがあります。時間の感覚がなくなるのです。目の前の活字に没入するせいでもありますが、おそらく、その静けさ、音の少なさが非日常的で、異空間にいるような感覚になるからです。五感に訴えかけてくる図書館。足を踏み入れるだけでも価値がある空間だと、学生に知ってほしいですね。そして何より、人生の支えになるような本と出会ってほしいと願っています。

（国際政策学部 国際コミュニケーション学科 兼清慎一）

特集 学びの場としての図書館　教員編

図書館は“ワクワクする知の宝庫”です

1か月にして、すでに絵本の読み聞かせをしている将来の図書館少女、川池の孫　なっちゃんです。

学生の皆さんが、図書館に行くときって、どんな時ですか？

私は、正直、学生時代ほどはしょっちゅう図書館に行くことは減りました。学生時代よりも、本を買えるようになったということもあります。日頃、私が、図書館に助けてもらっているのは、論文の取り寄せです。スタッフの方々に、たくさん取り寄せて頂いて、アドバイスもいただいて、たいしたものではありませんが、自分にとっては必死だった博士論文を書くこともできました。本当に感謝でいっぱいです。皆さんも、本や資料のことを図書館スタッフさんに相談してみてください。専門職の司書さんらが、「学びのガイド」もしてくださる場なのですから。さて、小学校の頃から図書館大好き女子だった私も、仕事のためだけに図書館を利用させていただいていると、正直、図書館でのワクワク感が減ってきています。「学ぶことは楽しむこと」とはいえ、それが仕事になると、苦しいことも多いからです。慎ましい年金生活になれば、また「ワクワクする学びを探しに」図書館通いするでしょう。それに、小学校の時から「将来の夢」だった作家になって、最高齢、芥川賞作家になるかも。まあ“老後の夢”は“お昼寝の夢”だと笑っちゃいますね。（ちなみに同級生の芥川賞作家には“運を貰おう”と握手をしてもらいましたが）いずれにしても、皆さんも「ワクワクする学び」の場として図書館に行きませんか。

（人間福祉学部 福祉コミュニティ学科　川池 智子）

本棚での出会い

私が大学生として通っていた学校には、開架式としては東洋一の大きさを誇ると言われる図書館があった。新館は、地上地下を合わせると11階建てである。別に戦前からある本館もあり、こっちも結構な規模だった。開架式とは、本棚が利用者に開放されていて、ほとんどの本を手に取ることができる図書館の形式である。閉架式だと、多くの本を司書の方に頼んで本の倉庫から取ってきてもらうという形式になる。数多くの本に直接触れることができるものだから（文字通り触れる）、図書館は私にとって一種の冒険の場所だった。通路を歩いて、これはと気が付いた本を手にとってぱらぱらとめくる。ほとんどは、目次を眺めて、世の文筆家はどのようなことに関心があるのだろうかと確認してお終いだった。しかし、こうしたことを繰り返すと、知識の体系というものが頭に入ってしまう気になった。新しい本なら街に溢れる広告や本屋で知ることができるが、古い本との出会いができる場所は図書館くらいしか私は知らない。昔書かれた本と今の本は似ている部分もあれば違っていることもある。それで、過去から現在への知識が頭の中でまとまった。県大の図書館は、もっとずっと小さいけれど、やはり開架式の本棚がある。小難しい本を読み込むのは大変だが、取りあえず脇を歩いて眺めてみてはいかがだろうか。まずは知識の体系ができれば、その中の一冊を読むのは随分と容易いものとなるだろう。

（人間福祉学部　福祉コミュニティ学科　畑本 裕介）

楽譜の読み方を教えてくれた資料室

音楽記号で記された「楽譜」という文献、及びその音声記録である「CD・DVD」とのかかわりが多い分野が音楽です。たとえば、J.S.バッハの平均律クラヴィーアという曲集は、国内外の主たるものだけでも25種類以上の版があります。「原典版」の典拠もバッハの自筆が複数あることから、どの原典版を信頼すべきか迷います。また「校訂版」の運指・装飾音の奏法については多数の意見が存在し、できることならすべて頭に入れておきたいところです。文学作品の「行間を読む」ごとく、楽譜で「記号の背景から音楽を読み取る」ためには、数多くの楽譜を深く読み解くことが力となります。学生にとって楽譜の購入は必須とはいえ、同一の楽曲の楽譜を複数冊所蔵するのは（高価ゆえ）夢のまた夢です。その時の強いみかたが「東京文化会館音楽資料室」でした。クラシック音楽関係の資料としては国内随一の所蔵を誇る資料室が、幸いなことに自宅から一時間もかからず、中学生の私でも利用することができました。当時は複写の制限もあり、一生懸命手書きで楽譜を書き写しました。レコードは係員に操作していただき制限回数だけ聴けるので、よく吟味して選曲したのに間違えてかけられたり…（涙）。音楽資料室で楽譜を照らし合わせながら集中して必死に聴いたバッハは今でも耳に残っています。

あれから〇十年、教員となった今でも時々駆け込み、授業資料の確認ができる強いみかたなのでした。

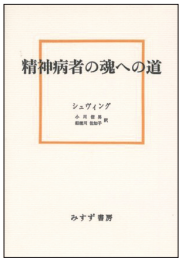
（人間福祉学部　人間形成学科　村木 洋子）

図書館職員の方々のお力添えに感謝！

私の研究は、公衆衛生看護学に関わるものであるため、看護学だけでなく、文化人類学、社会学、経済学といった他の学問分野の知見を必要としている。近年、インターネットの環境が向上し、他の学問分野の情報を得るのが容易になっているものの、看護学以外の他の学問分野の専門用語を正しく理解して、自分の論文に用いるには、意外と多くの労を要するものである。このようなとき、図書館職員の方々は、看護学以外の他の学問分野の文献に関する知識も幅広くお持ちであるため、私の研究や論文作成にとって大いなる助けとなる。例えば、図書館職員の方々に、私の専門外の学問分野の書籍や論文について相談することがある。すると、私が探し求めていた書籍や論文を、いとも簡単に検索して、探し出してくれる。あるいは、私の研究テーマを図書館職員の方々に説明したときに、図書館職員の方々は、どのような書籍や論文を検索すべきかを一緒に考えてくれ、その結果、適切な検索によって、自分がまさに求めていた書籍や論文が見つかることがある。さらには、図書館職員の方々の助言によって、自分が検索している書籍や論文と異なる書籍や論文を検索すべきことまで判明して、それにより、研究の新しいアイデアが生まれることもある。

このように、図書館職員の方々は、私にとって、研究の良きパートナーと言えるのである。

（看護学部　地域看護学領域　渡邊 輝美）



『精神病者の魂への道』
シュヴィング
みすず書房

私の一冊

Long ago 学生時代、実習記録を書いているときに「患者」という字には「心」という字がついていることにあらためて気づいた。誰もが持つ「心」をケアすることはどういうことなんだろう、と素朴に問い続けて年月は経った。今は学生と精神看護について語り合い、ともに探究することが日々の営みとなった。目に見えない「心」への接近やケアについて、稚拙ながらもその一端を伝えようとするとき、実習でよいケアをと学生と考えるとき、患者や家族、当事者の「心」をめぐって問いは続く。そんな時は図書館に行く、研究室の書棚をながめて先達に教えを乞う。さまざまな書物や論文に出会うが、問いの作業の最終地点で手にするのが、シュビング著「精神病者の魂への道」である。シュビングは1905年生まれ。精神科臨床での体験を記し1966年に第1刷が発行されている。歴史ある名著である。なかには今では行われていない治療やなじまない場面等は少なくないが、ひとり一人に施されたシュビングのケアの心は今に通じて伝わってくる。病んで傷ついた患者の「心」に温かい手をそっと当てるようなそんなシュビングの、真に寄り添う姿を見る。そして読者である自分も本の向こうのシュビングに「心」の手当てをされているような感覚さえ持つ。学び続けるみなさん、図書館に行こう。名著に出会おう。そこは知識は勿論のこと、先達の智恵や勇気そして「心」の宝庫である。

（看護学部　精神看護学領域　野澤 由美）

情報の集積地である図書館

私が看護を学び働く上で、図書館は欠かせない存在でした。看護学生の時は文献を調べにまめに通いました。というのは口実で、図書館の中にフリースペースがあり、そこで学生が集まっているので良く情報交換をしていました。今でも山梨県立大学の図書館で学生さん達が会話している姿を見ると、頑張れと応援したい気持ちになります。

就職してから一番図書館を利用したのは、まだ仕事に慣れていない1年目でした。私は大学病院に就職し、大学の図書館でより専門的な治療や看護について調べ、学びました。同期に就職した友人と待ち合わせをしたり、病棟の医師にも会えるので、やはり情報交換には重要な場所でした。就職して何年か経ち、学習会を企画する立場になると、新人の頃にまとめた資料が大いに役立ちました。

研究を行う上では、当時は文献検索は書籍の閲覧しかありませんでしたので、ウェブサイトで検索ができるようになった時の情報の多さに驚いたことを覚えています。現在は文献の検索もインターネットでできるようになり、以前より図書館に通う機会が減ったかもしれません。しかし温故知新、まさに書籍を手に取り新たな知見を得ることは必要だと思います。

また、司書さんは心強い存在です。学内にない文献を取り寄せるのにお世話になりました。期日に間に合わせるために必要な文献を他大学に借りに行くことも手はずを整えていただいたこともあり、感謝しています。

図書館を利用することは、皆さんが主体的に学ぶ指針を持つことにつながります。ぜひ上手に図書館を活用しましょう！

（看護学部　基礎看護学領域　吉江由美子）

特集 学びの場としての図書館　学生編

知識や思考が広がる図書館

私が最初に図書館を利用したのは空きコマの時間に授業の復習をする為でした。もともと中学校の頃から良く図書館を勉強する場として利用していたので、山梨県立大学の図書館も落ち着いた環境で、勉強するのに最適だと思いました。静かな空間だとより落ち着いて集中して勉強できるので、私たち学生には欠かせない場であると感じます。館内自体は少し小さいですが、そこには専門書であふれており、授業の補足を十分補える環境であると思います。

各分野の大学の先生方が執筆した専門書もわかりやすい場所においてあり、先生方がどのような研究をされているか詳しく知ることもできます。インターネットの設備も整っており、調べたいことや知りたいことをすぐに探すことができるのでとても便利です。ただ授業の課題をこなす学習をするだけではなく、探求心や好奇心をもって課題に取り組むことでより自分の知識や思考が広がるのでとても楽しいです。その為の材料が山梨県立大学の図書館にはたくさん揃っていると思います。図書館を色々な方法で利用するととても楽しいし、視野が広がると思います。学びの場所としては最高の環境です。

（国際政策学部　総合政策学科3年　大野 結衣）

本棚での出会い

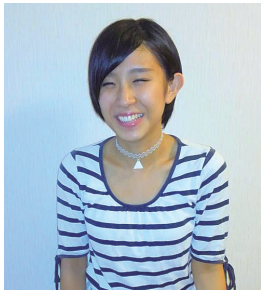
私は幼い頃に小児喘息を患っていたので、毎日のように病院へ通っていました。その病院の待合室で母がいつも絵本の読み聞かせをしてくれていて、そのお陰で本が好きになり、そして自然と、「図書館」という本に囲まれた空間も大好きになりました。その図書館が中学生のときから、「本を借りたり読んだりする場所」でもあり「勉強する場所」でもあるという認識になってきました。図書館は静かで、集中力を切らせるものがありません。そして、学習をする上で必要な資料が多くあります。私は大学生になってからそれらの資料を今までよりも活用しています。

私は国語の教職課程で学んでいるのですが、課題に取り組む上で中学校と高校の教科書をよく使います。その教科書が揃っているのは大学ならではだと思います。とても有難いです。様々な出版社の教科書を比較して検討することが出来ました。

また、自分の知らない分野の知識を得ることが出来るのも図書館の魅力だと思います。図書館内を歩いていると、介護や保育の本や演劇書に出会うことがあります。自分の所属する学部以外の専門書です。普段なら手に取らない本でも思わず手に取ってしまいます。

県立大学の図書館は、大好きな本に囲まれた学びの場でもあり、新しい出会いを与えてくれる場所でもあります。

（国際政策学部　国際コミュニケーション学科3年　橘田 侑奈）



図書館という空間

みなさま突然ですがクイズです。山梨県立大学の資料は約何冊あるでしょうか。答え合わせは最後にしたいと思います。読み終わるまでに考えてみて下さい。

インターネットが発達した現在では欲しいものは何でも手に入ります。物はもちろん知識もまた然りです。ではなぜ学校には図書館が存在するのでしょうか。それは図書館が本の保管所・閲覧場を超え、図書館という空間を提供しているからではないかと私は考えます。知識に囲まれた空間は学習には最適です。私は勉強するとき必ず図書館に行きます。それは私にとって学習に最適な条件が揃っているのもそうですが、同時に息抜きも出来る場所でもあるからです。図書館には図書の他にも雑誌や図鑑、DVDまであります。本棚の間を散歩したり、普段は見ないような本を発見したりするのも図書館の一つの楽しみ方です。そして、その息抜きもまた学習に繋がってくるように感じます。

それではクイズの答え合わせをしたいと思います。正解は約12万冊です。それだけの知識がここにはあります。まさにここは知の拠点といえるでしょう。本で得た知識は不思議と忘れないものです。普段はインターネットですぐ調べてしまう人も、たまには図書館をご利用ください。膨大な知識があなたを待っている事でしょう。

（人間福祉学部　福祉コミュニティ学科3年　笹本 幸乃）

つながりの場

私は幼い頃から物語が大好きでした。絵本をながめ、それが文字を読めるようになってからは小説に変わり、母には「本当に本の虫で言うこと聞かなんで困る」といつも小言を言われていました。そんな私は学校の図書館、県立・市立図書館には足繁く通いました。その中で感じていることは、図書館はあらゆるつながりの場だということです。図書館にいる人とつながる。時代・国・次元をも超え、本の中の人々とつながる。作者とつながり、自分の深いところとつながる。その多くのつながりに、私は救われてきました。

大学の図書館には専門書や絵本が豊富に取り揃えられているため、学期末や実習・ボランティア前に同じ形成学科の学生がおのずと集まり、１冊の本から会話が始まります。「こんな場面にこの絵本、どう思う？」「この問題、核は～だよね」「この実践事例、こうしたらもっと楽しいと思うんだけど！」こうして、ごく自然に深めあえるつながりができるところが、不思議であり私の人間形成学科の好きなところの一つです。

このように、本を借りて自分の中で深めるだけでなく、他者とつながることで深まる学びもあると思うのです。それには同じ学びをする者が集まる大学の図書館は最適です。これからもたくさん利用させていただきます。

（人間福祉学部　人間形成学科2年　板谷 未来）

私と図書館

大学の図書館はテスト前や実習中、多くの学生が利用しています。私は課題レポートや実習の記録などを書く際に図書館をよく利用していました。静かな環境で落ち着いて勉強ができ、黙々と作業に取り組む傍ら、頑張る仲間の姿に励まされることが多く、図書館には様々な場面で助けられてきました。

4年生になると研究が始まり、さらに図書館を利用する機会が増えました。研究では、文献データベース・サービスを用いて、文献を検索し、内容を読み込みながら、研究目的に合うものを絞り込む作業を繰り返し行いました。考察の際も、書籍や資料を探し、読みながら、参考にしたり、引用することでさらに考えを深めていくことができました。膨大な情報がある中で得た情報をただ鵜呑みにしてしまうのではなく、情報を自分で解釈、理解しながら活用し、考えを深めていくことが大切だと思います。私は図書館を利用する中で、このような力が身についたと感じています。研究をはじめとした日々の学修を行う上で、私にとって図書館はなくてはならないものだと思います。今後も自分の学びの場として活用していきたいと思います。

（看護学部4年　森田 愛美）

学びの場としての図書館　～身近になった図書館～

「学びの場としての図書館」というテーマをいただき、私がまず感じたのは、図書館が身近な存在になったということでした。十数年前にこの大学に通っていた時も図書館にはお世話になりましたが、就職し、しばらく足が遠のいていました。しかし、昨年大学院に入り、またお世話になるようになりました。課題やレポートの作成のためによく通っていますが、最近お気に入りの利用方法があります。

それは、図書館の中を色々考えながらブラブラするという利用方法です。元々本屋さんが好きで、時間がある時には目的もなくブラブラしていましたが、最近は図書館の中を、職場で支援に困っている利用者さんのことを考えながら、本や雑誌を何気なく見ていると、思わぬヒントをもらうことがあるのです。看護師として経験を積んできた今、“学ぶ”ということは、経験してきたこと、していることの意味を考えていくことなんだと感じるようになりました。その過程に図書館は欠かせない存在であり、とても身近な存在になったと思っています。

（看護学部大学院　在宅看護学分野2年　大八木綾子）

図書館通信 library report

ここでは、両館でみなさんにお知らせしたい図書館の情報や図書館で起きたできごとなどを紹介します。

県立大学図書館

開館時間を延長しました

県大図書館では、みなさまからのご要望に応えるため、昨年度、19時以降の開館時間延長を試行的に行っておりましたが、利用が多かったため、本年4月より正式に開館時間を延長し、9時～21時30分といたしました。図書館資料の貸出・返却、視聴覚資料の利用、ノートパソコンの貸出、レファレンスサービスにつきましては19時までですのでご注意ください。また、学外の方の利用はこれまで同様19時までとなります。多くのみなさまのご利用をお待ちしております。

県大文庫を設置しました

山梨県立大学の発行物、関連資料、教員著作などをまとめたコーナー「県大文庫」を１階閲覧室内に設けました。図書、逐次刊行物のほか、パンフレット、ちらし、映像記録など多彩な資料がございます。

学生のみなさんのゼミ、クラブ、研究会等の製作物や活動の記録も積極的に収集しています。

大学の過去、現在を知るための資料として保存、活用いたしますので、資料提供をお願いします。

県立大学看護図書館

蔵書検索システムを変更しました

3月より図書館の蔵書検索の画面が変わりました。県大図書館と看護図書館で分かれていますが、どちらも両館の蔵書を検索しますので、同じ検索結果が得られます。また、新着図書や貸出ランキングのコンテンツが増えましたので、是非チェックしてみてください。

「クイックサーチ」から簡易検索が可能です。また、左上の「詳細検索」メニューからは、より詳しい検索画面に移動できます。医中誌webやJDreamⅢなどの看護系データベースをご利用の場合は、「学科毎・分野毎のリンク集」の中の「看護データベース」からご利用ください。データベースの利用方法や結果の見方などについてご不明な点がございましたらお気軽に職員にお声かけください。

編集後記

私は、本年度から飯田キャンパスの図書館に赴任いたしました。長く司書として勤務しておりますが、大学図書館は初めてで、毎日が発見の連続です。

今回、「YONZYA」の編集に携わり、清水新学長の巻頭言、特集「学びの場としての図書館」に寄稿いただいた先生方、学生のみなさんの文章を読ませていただき、あらためて大学図書館の奥深さに触れた思いです。

本号の発行にご協力いただいたみなさまに心よりお礼申し上げます。（山形 敏貴）

図書館だより YONZYA（よんじゃー）Vol.11
平成27（2015）年12月1日発行

編集・発行
山梨県立大学図書館
甲府市飯田5-11-1　TEL：055-224-5340
E-mail：lib@yamanashi-ken.ac.jp
山梨県立大学看護図書館
甲府市池田1-6-1　TEL：055-253-9429
E-mail：toshokan@yamanashi-ken.ac.jp